

---

女

VISIA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女

### 【Nコード】

N8760J

### 【作者名】

V I S S I A

### 【あらすじ】

気になった二人は、夢で見たその場所へ、試しに行ってみることにした。

## 確かめる（前書き）

夢の世界へ行きたいですか？

## 確かめる

同じ夢を、見るようになった。

車で、どこに出かけようとも必ず、同じ池へ到着してしまうのだ。

池には、顔を水面から半分だけ出した青白い女がいて、こちらを見ている。

その女の目は、少しの悲しみと興味、そして多くの殺意を含んでいた。

女は、私を知っているように感じる。

…誰だったかな

暫くして、女の所に冷たい雨が降り始めると、女は恨めしそうにコチラを睨みつけながら、静かに池へ沈んでいった。

その夢を妻に話す。

「あなた昔、池で溺れた話してたじゃない？」

…そうだったけ？

「気になるなら、試しにその池へ行ってみない？」

「夢の話が、現実にあるかな…ただの夢話だよ」「でも、これ以上その女に好きにされるのは嫌」

「……………」

その時の妻の顔が、あの女の顔に見えていた。まるで両方の女性から嫉妬されているような気がした。

次の日、私は会社を休み、妻と共にその場所へ行ってみることにした。

夢の中で、何度も通わされた道だ。おそらく、間違っことはない。

…車を走らせて、三時間が過ぎた頃だった。

「あなたの話だと、この辺から曲がるはずよね」

「そうだね。ええと…」

「あの石碑じゃない？」

「ああ、あれだ」

右折して、細い山道を走っていく。

車の振動がひどく、ハンドルを必死に掴む。妻は頭をぶつけて痛がっていた。

道は更に酷くなっていき、車が暴れ始めた。車内で、ゴミ箱やら弁当などが激しく舞う。

それらがシートや服を汚す光景は、洗濯機の中の、無抵抗な洗濯物のようだった。

車が跳ね、中の私達が座席から跳ね、空き缶やゴミが暴れる。

「あなた！」

「喋るな！舌噛むぞ」

「そうじゃなくて、ストップ！ストップ！」  
「えっ？」

慌ててブレーキを踏んだ。また、妻が頭をぶつけていた。

「どうしたんだ？」

「あれ、あれじゃない。あなたが言っていた池」

車の窓を開け、妻が指差す方向に池が見えた。

確かめる（後書き）

その池が、夢に出てきた所なのかは、ここからは分からなかった。

辺りも薄暗くなってきた、今そこへ行くのは、さすがに気が引ける。

車で一晩過ごすことを二人で決めた時、近くに民家の明かりが見えた。

行ってみる(前書き)

ホタルよ、ホタル  
こちらへおいで

ほら、この水は…



行ってみる

二人は車を降り、民家の所へ行ってみることにした。池の事について、何か聴けるのではないかと、考えたからだ。

ただ、これが昔話の場合には、大抵よくない事が起こる。

「最悪でも、死ぬことはないわよ。ハハハ」

こういつ時の妻には、救われる思いがする。

…羨ましい性格だな

五分ほど歩いて、妻が息切れし始めた頃、民家の玄関先に辿り着いた。

民家は、古い木造の小さい建物だったが、人が住んでいると思わせる、手入れされた庭も含めて普通の家だった事に、少し安心した。

呼び鈴が無いので、戸をドンドン叩く。

「すみません、どなたかいらっしゃいませんか」…1分ほど静かに待つ

すると、建物の中での物音が段々大きくなり、そして近づいてくると、戸がガタガタ磨り硝子を揺らして開いた。

「すみません、ちょっと聴きたい事があるのですが…」

小柄な婆さまが、こちらをジッと見て、  
「何だい？」

「この近くに有る、池のことについて…」

「特にないな。それよりアンタら、こんな山奥によく来たもんだ。  
どこから来た？」

「からです。」

「そんな遠くから…この辺にはウチの家しか無いけど、アンタら今  
晚どうするね？」

「車の中で寝ます…」

「そうかい。だったら、泊まっていっかい？」

「え、いいんですか？」…隣の女性の青白い顔見てたら、ほっと  
けないさ。ひどい顔して、どこにブツけてきたんだい？」

行ってみる（後書き）

その夜、妻は出された料理を一口も食べずに、布団に入って寝てしまった。

大丈夫だろうか…

## 思い出してみる（前書き）

私達は、囲炉裏のある部屋で、暫く待つように言われた。

奥の台所で、食事の準備の音がする。隣では夫が、ホツとした顔で囲炉裏に手をかざしている。

私は、この部屋から寂しい感じを受けていた。

それは、テレビが無いとかそういう事ではないと思う。

なんだろう…

部屋の隅々まで観察していると、低いタンスの上の写真立てに気づく。

そこには、お婆さんの孫と思われる子供の写真があったが、その顔を見た時、忘れていた過去の出来事を思い出す。

## 思い出してみる

16年前

その時、私はクルマの後部座席で、外の景色を見ていた。  
ヒマだったから、家族旅行に来てみたけど、ずっとクルマの中。

ああ、暇暇暇暇暇。

寝過ぎて、もう睡眠は「暇ツブシ」にもならないし、帰路と言っ  
ても家まで3時間ぐらい。

ああ、暇暇暇暇暇。

なのに、ウチの両親は何が楽しいんだろ…

「ねえ、アナタ。あそこの石碑の所から入れるんじゃない？」

「ああ、そうだね」

…ちょっと、なに寄り道してんのよ！

「紅葉を観ていきましよう。ほら典子、綺麗じゃない？」

「早く、帰ろうよー」

「ハハハ、典子は花より団子だな。」

ぶーぶー

5分ほど走ってクルマが止まる。

「ちよっと二人で歩いてくるけど、典子は？」

「待ってる。」  
「そう？じゃ、すぐ戻るからね。」

両親は、歩いて行ってしまった。  
まあ、このままクルマの中にも暇だし、外に出てみることにした。

少し、空気がヒンヤリする程度で、気持ちがいい。  
背伸び、欠伸、遠吠え大サービス！うおーっ

うーん、新大陸上陸ってこんな感じだと思う。　ぶはー、と一息  
はいて落ち着くと、急に冷静に戻った。

…さて、二人が戻るまで帰れないんだな

どうするか思案していると、目下にキラキラ光る水面が見える。  
ちよっち行ってみようかな…

クルマから麦わら帽子を出してきてかぶる。  
夏に買ったもらった、とても気に入っている物で、冬でも使いた  
いと思わせる魅力があった。

クルマの窓を鏡がわりに帽子の位置を直すと、いつもの笑顔の練  
習。

…よし。

池の方を向き、降りられる所を探す。  
帽子を傷つけたくないので、木々や豪草の少ない所…んー。

？

この辺に住んでいる男の子だろうか。自分より少し年下な感じがする。その子と一瞬目が合った時、ついて来いと言われた気がした。

えっ？

男の子は、池の方へ木々をくぐっていく。私も慌てて後を追った。その道は、しゃがまなければ通れない程低かったが、帽子がぶつからない位の幅は有り、この子の獣道みたいだった。

そして、そのトンネルを抜けた時、目の前に池が広がっていた。

思い出してみる(後書き)

その池を向いて、先程の男の子が立っていた。

私が声をかけると、その子は、ゆっくりと振り返り…



抱きつかれる(前書き)

ねえ、ママ。

私、帽子なくしたの…

ごめんなさい

抱きつかれる

男の子がこちらを向いた時、悲しそうな表情をしていた。

目に力は無く、顔色も悪い。

だが、それらを除けば普通の男の子に見えた。

…赤い鼻水？

私が何か話そうとすると、男の子は右腕をゆっくりと上げ、私の後ろを指差した。

えっ？

急に、背後からの気配が強くなる。

動いたら殺されるような危険な感覚。それが、静かに後ろから近づいてくるのだが、体が動かせない！

…動けない！何で！？

男の子に助けを求めようとしたが、声が出せない。あ…う…

男の子は、私の背後を指差したまま目から赤いものを流し、首を横に何回か振るとその場で透けるように消えていった。？

背後から来ていたソレの息が耳元で聞こえたとき、二本の腕で強く抱きつかれた。

冷たい体を私に密着させ、更に腕に力を加えてくる。背中感触から女性だと思ったが、体温が全く感じられなかった。

私の顔の横に、女性の顔がある。唯一動かせる目をそちらに向けると、女性は口から、虫や泥や赤いものが混じった大量の水を吐き出し、私をびしょ濡れにさせた。

腐った臭いのする水で息ができず、少し飲んでしまう。うえー

女性は暫くの間、開けた口から水を吐き続け、私は寒さと恐怖で意識が遠くなり、気を失ってしまった。

抱きつかれる（後書き）

両親から、その後の話を聴くと、池の中へ体を沈めて溺れかかっていたそうだ。

風邪ひいたし、帽子なくしたし、もう散々。

…イヤなこと思い出したな、まったく。

隣で、夫は新聞を読んでいる。

…5分程すぎて、お婆さんが料理を運んできた。

その料理のなかの、あの男の子の赤い鼻水色に似た、トロツとした煮込み料理を見つけたとき、私は食欲が失せ、敷いてもらった布団で横になった。

## 運んでみる（前書き）

その時、私は隣の妻のことよりも、ある新聞の記事の内容が気になっていた。

学生の頃、近所に住んでいた先輩の女性が行方不明になって17年、情報を求める記事だった。

…忘れてた

掲載されていた当時の彼女の写真は、あの女の顔に少し似ていた。

## 運んでみる

17年前、某所月夜

「兄貴！どうするんですか、「コレ」

「ウルサイな黙ってる」

「そんなこと言っただって死んでるじゃないですか」

「いいから黙ってる、お前！」

「痛てえ。叩かなくてもいいでしょう、兄貴」

「ウルサイ。あああ…」

「兄貴が、アノ女に悪戯しようって言ったからですよ」

「うるさい！あの女が頭ぶつけたのは、俺のせいじゃない！」

「でも…」

「いいから、お前そっち持て！」

「どうするんですか？」「死体を山に捨てる。お前の車、貸せ」

「……………」

「逆らうなら、お前の家の壁に、額縁に入れて飾ってやる」

「（兄貴なら多分やりかねない）」

「おい、おっさとヤレ」「へいへい、よいしょ」「よいしょ」「よいしょ」

「よいしょお」

「よいしょおお」

「よいしょお」

「よっこらしょお」

「はあはあ」

「はあはあ」

「意外と、この女重いですね……はあはあ」

「いいから、早く車に載せるぞ。トランク開ける」

「よっこらしょお」

「よっこらしょお」

「はあはあ」

「よし、車に乗れ。行くぞ、お前運転しろ」

「ひひ。兄貴も、トランクで相席どうですか？」  
「アホ。俺は、無口な女は嫌いだ！……助手席でいい」

3時間後

「兄貴、この辺なら大丈夫じゃないですか？」

「よし、あの石碑の所から山へ入れ」

5分後

「……」

「どうした？トイレか」「……道が悪いせいかな？後ろで、ガタガタ聞こえないですか、兄貴」

「女が、暴れてたりしてな、ハハ」

「怖いこと、言わないで下さいよ……あれ？」  
「どうした？」

「兄貴が変なこと言うから、エンストしたじゃないですかあ」  
「……」

「それにしても、ココは気味の悪い所ですよね」  
「……」

「兄貴の彼女ってブサイクですね」  
「……」

「どうしたんですか？」  
「俺の後ろ、誰かないか……」

「……いいえ、誰も。」  
「そうか……おい、あそこに池みたいなのが  
見えるだろ」

「ええと、あれですね」  
「あそこに棄てて、さっさと帰るぞ。後ろ開ける」

「へいへい。開けましたよー」  
「……おい、女どこだ？」

「どこって、トランクで三つ指ついて、ウエルカム言ってるでしょ」  
「いないんだよ……女が」

「わあああああ……！」  
「どうしたっ」



「女が、女が後部座席にいい、いるっ！」

「生き返ったのか!？」

「……死んだまま横になってる」

「……さっさと棄ててくるぞ、手伝え!気のせいだ」

運んでみる（後書き）

……池にソレを沈めて、車の所に戻ってきたが、結局エンジンはかからない。

先程の事が気になり、すぐにもココを離れたかったが、辺りは暗く、道に迷いそうだった。

食べ物といえは、ポケットのガムしかなく、ふざけて膨らませていたらガムが虫だらけになる。

おえっ

……暫くして、二人が暇つぶしに夜空を見ていたとき、小さく民家の明かりが見えた。

## ひとりにされる（前書き）

二人で暫く、その民家の明かりを、車の外で見っていた。

唐突に、兄貴が「蜘蛛の糸」の話をしてくる。

あの明かりに何か、感じるものが有るのだろうか…

## ひとりになれる

「お前、ちょっとココで待ってる。俺、あそこに行って電話かけてくる」

「…えっ？」

「じゃあな」

「…あ……兄貴……」

行ってしまった……

こんな所に一人か。滅多に経験できる事ではないな……リアル肝試し。

あの女が沈んでいる池のそばで……

まあ、こういう時にはどちらかが襲われるって決まっているよなあ。

……兄貴でありますように

ん、雨ふってきた？

車に乗って待つか、ぬれるよりマシだ。

今、エンジンかかったら兄貴、置いていこうかな……ダメか。

何で、こっとなっちゃったのかな。

《……………い》

もし、コンビニで兄貴に会わなかったら

《……………さい》

って考えてもおそいよな

《……………ださい》

ああ、どうしよう

《……………ください》

あ、兄貴帰ってきた

《……………ケテください》

「兄貴い兄貴い」

《タスケテください》

「どうでした？」

《……………チツ》

「何、怒ってるんだ？舌打ちしやがって」

「え？」

「まあ、いいや。あそこ行って来たんだけどな、あの家へんなんだよ。」

「え？」

「家の中で婆さんと子供の声があるから、玄関の戸を叩いて、電話かけさせてくれって頼んだんだが、反応が無くてな……」

「……………」

「静かに戸を開けてみたんだよ」

「……………で？」

「何も無かった」

「?????」

「廃墟だよ、あそこは」

「でも、兄貴。明かりが見えるよ、あれホラ……」

「廃墟は廃墟だよ。くそつ胸くそ悪い、寝る。」

「これから、どうするんです?」

「明日考える。」

あーあ、兄貴寝ちゃったよ。

…こつちも寝るか

《タスケテください》

《気付けてください》

…あれ?

ラジオつけてたっけ?

## ひとりにされる（後書き）

二人が、車の中で眠り始めて2時間が過ぎた頃に、エンストしていた車が、ゆっくりと動き出した。

エンジンは、かかっていない。

車は、ゆっくりと進み道を外れ坂を下って、真っ直ぐ池へ向かった。

そして、二人が異変に気づいた時、車の前部分が池に沈みかけていたのだ。

だが、なぜか車のドアは開かず、窓ガラスを割ることもできず、二人は車と共に池へ沈んでいってしまった。

その様子を、子供と老婆が最後まで見ていた。

それから17年後…

連れて行かれる（前書き）

私は、その家の一室で布団に横になっていた。

ただ、どれだけ時間が過ぎても眠れそうにない事はわかっていても、目を閉じて横になっていたかった。

暫くして、隣の布団で夫が寝始める。

その数時間後



連れて行かれる

私が、なかなか寝付けず色々考え事していると、隣の布団で寝ていた夫が起き出す。

…トイレかしら？

暗闇でバランスを崩した夫が、足で私の頭を踏みつけた。

「ぐっ」

「あ、スマン…」

フラフラと、手探りで夫が部屋を出て行き、静かな部屋が、更に静かになった。

同時に、何かの不安が急に心を浸食し始めていく。

…私もトイレ行こうかな

体を起こそうとした瞬間、金縛りになり仰向けのまま、目を閉じることが出来なくなった。

あれ？

ゆっくりと、床を擦る足音が近づいてくる。

嫌な気配、まるで私はここにいるよ、と言っているような何かの存在がゆっくりとゆっくりと、枕元まで来て立ち止まった。

…わあああっ！

青い顔が、私を上から見下ろしていた。

…あの時の少年？

その少年から、あの時と同じ鼻水が、ツツウと私の顔に垂れ迫る。ワザと口元を狙っているようだ。

…避けられない!!

だが、鼻水が口にあと数ミリというところで奇跡が起きる。屋根が吹き飛ぶのではないか、と思うくらいの凄くしゃみが、私から出たのだ。

べひゃあくしよいつつ

そのくしゃみは鼻水を少年の顔へ飛び散らせただけでなく、風圧と鼻水で、少年の髪さえも逆立ててしまうほどの威力があった。

私は、その少年の姿に笑いが止まらなかった。そして暫く笑っている、いつの間にか金縛りはとけていた。

…君、昔のままだね。全く変わってない

「あれから、何年過ぎたのかな？」

「……………」

少年は何も答えない。

ただ、こちらをジッと見ているだけだった。

「君のお墓とか、どこにあるの？」

少年は、首を横にふって少し悲しそうな顔をする。

「じゃあ、君の体は今どこにあるの？」

少年は、私の手を掴むと信じられないほどの力で引っ張り、どこかへ連れて行こうとした。

私は、暫く床の上を引きずられながらも、なんとか立ち上がり、少年に引っ張られていった。

連れて行かれる（後書き）

夫は、トイレから戻る途中、玄関の戸を体当たりでブチ抜いて行く裸足の妻の姿を見ていた。

妻は他にも、柱や襖、家具家電などを破壊していったみたいだった。

夫は気になって、妻の後を追った。

感じる（前書き）

外は暗く、もう妻の姿は見えなくなっていた。

……？

遠くの方から、木々をなぎ倒す音が聞こえる。

車を置いてきた

辺り、池の方からか？

…死ぬなよ、典子。

## 感じる

「おい、典子！典子！」

「……………ん、あなた？」

「大丈夫か？」

「…私…あれ？」

「途中で、頭ぶつけてたからな。少し気を失ってたみたいだ。」

「……………あの少年は？」

「少年って、典子ひとりだったぞ」

「……………」

池のそばで倒れていた彼女を、支えながらゆっくり立たせると、二人で暫く池を見ていた。

「典子、……………泣いているのか？」

「私……………」

少年について、妻が話し始めた。

過去に会っていることや、ここまで連れてこられた訳など。

自分には信じ難い話ばかりだったが、妻の表情は真剣で嘘を言っているようには思えなかった。「つまり、その少年の遺体が、この池に沈んでいると考えていいのかな」「多分」

「……………あの女…いや、先輩もこの池の中に？」

「それは、わからないけど…あの少年と何か関係はあると思う。」

「……池の中かあ」  
「……深そうだね。」

池の中から遺体を引き上げるのは、素人には無理に思えた。

「……どうする？典子が、この池の水を飲み干してみるか？」

「……池の水をお酒に変えてくれたら、望み通りに。」

「……」

「ふふん。で、どうするの？」

ちょうどその時、二人のそばを首輪の無い犬が歩いていく。

……池の水を飲みに来たのだろうか？

その犬が水に口をつけた時、池から出て来た白い手が犬の頭をガシリと掴み、一瞬のうちに水の中へ引きずり込んでいった。

「そつえば、あんな貯金箱あつたな……」

「あつたわね……」

「……」

「……」

「……ねひ。」

「？」

「ちよつと、会ってくるよ。典子の言つ少年に」「えっ……ちよつと

……」

さっきの犬がいた場所まで行くと、しゃがんで右手を池の水へ入れた。



## 感じる（後書き）

手を入れていた池の水は冷たく、少し手にまとわりつくような粘  
度を感じた。

その水が、段々固まるように感じた時、それは人の手となった。

案内される（前書き）

手を掴まれた時、柔らかい感触はあったが、想像していたより小さい手だった。

ひよっとしたら、自分の力で引き上げられるのでは、と一瞬思ったが、体が急に重くなり、動かなくなつて無抵抗のまま池の中へ引き込まれてしまった。

…池の中

自分の腕を引っ張っているのは、少年だった。

その少年は前を向いたまま、特に手足を動かして泳ぐ事もなく、池の底へ向かつて進んでいく。

息は、苦しくならなかった。

行き着く先が竜宮城なら、待っているのは乙姫だが、自分を待つのは…

## 案内される

暗い池の底に、車が沈んでいた。

古いタイプの車種だという事が、沈んでからの年月を感じさせる。

周りには不法投棄が酷く、色々な物が沈んでいた。

(先輩がここに…)

少年が、車の所へ自分の腕を引いていく。

(車の下に…何か白い…)

近づくにつれ、ソレが人の形をしていることが分かってくる。

(何故、ここに…)

黒く長い髪が水に揺れている、恐らく骨だけの肢体。

ただ、目の前の少年が普通ではない為、ソレに何が起きていても不思議ではない。

(もし、生きてたら…)

ようやく、目的の場所に着いたらしい。

少年がソレを指差す。

人の形をしたソレ、先輩だった人、うまく言葉が出てこないまま、  
三步ほど進んで顔を覗いた。

(えっ……?)

横たわったソレは、昔の先輩の姿をしていた。  
髪型も、鼻筋や赤い唇まで、自分の記憶にある先輩そのままに。

(先輩!!!!!!)

先輩を、両手で抱き起こす。首を支え、昔の童話にあるように唇にキスをした。

感情の高ぶりに自分を抑えられなかった。

その時、先輩の閉じられていた目が大きく見開かれ、急に体が温まってきたように感じた。

(…生き返った?)

だが、その目は無機質な感じのままだった。

(何だろう、この違和感は…なあ、君どついう事なの?)

少年の方を見ると、ゲラゲラ腹を抱えて笑っていた。

(えっ?)

急に、自分の体が軽くなる。

すると、自分がキスをしたソレの正体が分かった。

……大人向け高級人形。

案内される（後書き）

自分が、少年をキッと睨みつけると、少年は首を横に何回か振った。

（先輩はどこだっ）

少年は、少し悲しそうに顔をして上を指差す。

…そういえば

妻の過去の話思い出す。

（先輩の目的は、典子なのか？）

少年が頷く。

（先輩は死んでるんだろう？）

少年は、首を横に振った。

女(前書き)

ドングリ ころりと  
お池に落ちた

白い手 出てきて

こんにちわ

幽霊の坊ちゃん  
私と一緒に…

女

夫が池の中に出かけてから、暫く静かな時間が流れる。

その間、不安は感じていなかった。あの少年なら、夫の命まで奪うことはない、と思っていたからだ。

…私も行きたかったな

なかなか経験できる事ではない。  
夫の真似をして、池の中へ手を入れてみるが、何も起こらなかった。

……………。

池の水を、手でパチャパチャさせながら、暇を持て余していると、

ぱきっ

…？

ぱきっぺきっ

……………後ろから音？

ぱきっぺきっぱきっ

…何だろ





「……私の夫に何か用ですか。」  
「ワタシノカレヲ、カエシテ。」

「いや。貴女の事は、何も分からないけど、今は私の夫ですから。」  
「カエシテ。オネガイダカラ、カエシテ」

「そんな、悲しい顔しても駄目。さっさと成仏しなさいよ！」  
「チツ。ウザイオンナダナ、オマエ」

「……えっ？今、なんて」「ナンデ、コンナヤツニ……オマエ、カレヲ  
ダマシタロ？」

「わ、私は別に……」  
「オマエガイナケレバ」

女は白い腕を伸ばし、私の首を絞め、ニヤニヤ笑い始めた。

……息が……あ……ああ……

「ヒヒヒヒヒヒヒ」

意識が薄れていく。辺りは夜だというのに、何故、目の前が明る  
いのだろうか？

ああ、花畑が見える。

……あれ？お婆さん、あの家のお婆さんが……笑っている……

女（後書き）

お婆さんは、微笑んだ顔を近づけながら、こちらに手を伸ばしてきた。

「孫を……」

最後は聞き取れなかった。

首に手が触れた途端、世界が暗転した。

## 争う（前書き）

### 池の底

（先輩が生きてるって、どついう事なんだ？）

少年は首を傾げ、”分からない”という表情をする。

（…とにかく、早く典子の所へ行かないと！）

少年が足を掴んで、それを拒む。

（何故だ。先輩に何か言われてるのか？）

少年は、身振り手振りで何かを伝えようと、必死になる。

（…つまり、先輩にこき使われている、と？）

少年は頷く。

（逆らえないんだな？）

少年は激しく頷いた。

（だったら、自分が何とかするから、典子の所へ行かせてくれないか？）

少年は迷っていた。

(典子と したいんだろ?)

少年が真面目に頷く。

(よし、典子の所へ早く引っ張って行ってくれ)

## 争う

池から這い上がると、女性の姿があった。誰か倒れているのも見える。

…立っているのは…先輩か？…じ、じゃあ…

先輩は、暗く静かな世界の中、その白い肢体を長い黒髪で隠し、こちらを見ていた。

「フッフ。」

……！

「声、出せないでしょ？」

先輩が、一歩近づく。

「体、動かないでしょ？」

先輩が、更に近づく。

「私、貴方のことを思い続けて…」

先輩が、両手を差し伸べる。

「私、生き返ったのよ。」

……！

先輩に抱きつかれた。その体は温かく、柔らかかった。

「私が生きているの、わかる？」

耳元で囁く声は、心まで怪しく響いた。  
気持ちが揺らぎ、体の力が抜けそうだった。

「私と二人で、この…」

先輩がギョロリと目玉を下に向けると、足を掴んでいる手があった。

…典子！

「そう…簡単に…死なないわよ…」

「まだ、生きていたの？ 私達の邪魔はしないで。」

「貴女こそ、夫婦の邪魔してるじゃないの！」

「あら、私達はこれから夫婦になるのよ。アナタは関係ないわ。」

「うるさい！ 鴉女」

「なによ、蛙女！」

女性二人の言い争いが始まった。毒舌や汚い言葉が次々に吐き出されていく。

そして、お互いの罵声が次第に、高く大きく、早くなっていた。  
自分は、この場から逃げたかったが、体が動かない。

……。

やがて、“言葉”という弾丸が尽きて、お互いの沈黙に間が持たなくなつた二人の女性は、激しい格闘戦に突入した。

相手の頬を平手で打つたり、髪を引っ張って倒したり鼻血が出る程に遠慮が感じられなかつた。

暫く、二人は上になり下になり争っていたが、お互い掴み合ったまま斜面を転がり出すと、そのまま池へ落ちていった。

争う（後書き）

池に落ちても、二人はバシャバシャ争っているようだった。

…子供のけんか。

二人は暫くすると、お互い力尽き、沈んでいった。

…やれやれ。



知る（前書き）

不安は、突然訪れる。

知る

二人は、池に沈んだまま浮かんでこなかった。

あの少年もあれから姿を見せず、少し淋しい感じがしていた。

……。

水辺にしゃがみ込み、ぼんやりと池を眺める。

時々、池に手を入れてみたが、何も起きなかった。

…典子。…先輩。

「ああ、こんな所にいたか。」

……あの家の婆さん？

懐中電灯の光を向けられ、急に現実に引き戻された気がした。

「家の中は酷い有り様だし、アンタら二人はいないし、捜してみればこんな所にいるし。」

……。

「いったい、どうした？」

「……え……ええと……」

「何かあったか？」

「……」

「顔色の悪い、あの女の人はいないようだね?」「えっ…ああ、…ええ」

一瞬、どちらの女性の事か、判断に迷った。だいぶ、疲れているのかもしれない。

「妻は…」

「この池には、…ぬまこ池」という名が付けられている。」

「?」

「だが、もう一つ別の名前があるのだよ。池の前で、手を叩いてらん」

「…ぱんぱん。こごうですか?」

「うむ。」

何か白いものが、ゆっくり浮かんでくるのが見える。

……?

小さな水音をたてて池から出てきたのは、後ろを向いた年配の男性の頭だった。

その頭が、静かにこちらを向くと、青白い顔が口を開く。

ゲエエエエッぷ

…いきなりゲッぷかよ

「この男性は誰です?」「私の爺さんだよ。たまに会いに来ている。」

「

「……………河童ですか？」

「普通の人間だよ。何年も前に死んだけどね。」

「？」

「こちら側に遊びに来ているんだよ。この池は、あの世への門でもある。」

婆さんが、池に向かって小さく手を振ると、爺さんは静かに沈んでいった。

「……………」

「もし、この池に落ちたのなら、助けるのは簡単な事ではない。」

「……………どうすれば……………」

「一時的に、あの世の門を閉じる方法がある。」

知る（後書き）

婆さんは、微笑んだ。

だが、その微笑みが、自分の不安を更に大きくしていく。

無謀（前書き）

「：そんな事が、出来るのですか？」

「うむ。」

婆さんの顔から、笑みが消えた。

## 無謀

婆さんは懐から、人肌に冷めた缶茶を取り出した。缶を開け一口啜ると、雲ひとつ無い夜空を見上げる。

木々の、三角シルエットを額縁にして、ちかちかと沢山の星が瞬く。そこを、長い尾をひいた彗星が、ゆっくりと横切っていく所だった。

婆さんが、こちらを向く。

「あれを見たことがあるかい？」

「彗星ですね。初めて見ますが……」

「私は三度目だよ。」

「それより……」

「ああ、簡単に言つと、あの彗星を池に落とす。」

「えっ？」

婆さんが、彗星に向かって大きく手を振る。

「おい。」

「……冗談でしょ？」

「……冗談だよ。」 婆さんが手を振るのを止めると、近づき始めた彗星が、適当に向きを変え何処かへ飛んでいってしまった。

「…で、他に方法は無いのですか？」

「…あの彗星が近づくと年の今日、日の出までの間は、この池の水が酒に変わる。それを全て飲み干せばいいのだ。」

「あと四時間で？」

「うむ。」

「仮に、飲み干せたとしても、酔って助けに行けるかどうか…」

「後の事は考えるな。すぐ始めるのだ。」

「…わかりました。」

自分が池の側まで近づくと、先客が四つん這いになり、その池の酒に頭を突っ込んで、飲んでいる姿があった。

少し遠慮して、離れた所に移動する。

「…この辺でいいか。」 正座して心を落ち着かせ、顔を叩いて自分に活を入れると、四つん這いになり、池に顔を突っ込んだ。



無謀（後書き）

婆さんが、自分の後ろに立つ。

「そのままで聴け。この池は水量が減ると、それを元に戻す為の部隊がでてくるのだ。そうなれば飲み干すのは更に困難となる。」

……！

「まあ、心配するな。応援は呼んである。」

自分が、少し顔上げて周りを見渡すと、先程の先客以外にも、たくさんの人？たちが池に沿って並び、むさぼるように酒を飲んでいた。

それは、宴会という雰囲気ではなく、今の内に飲めるだけ飲んでおけ、という“必死さ”ばかりが感じられる。

「私の知り合い達だ。みんな、酒で寿命を縮めた猛者だよ。ヒヒヒ」

## 限界（前書き）

昔、「五色景」と呼ばれていた池があった。

どこにでも在るような普通の池が、突然に白く濁りだし、酒の匂いを放つだけではなく、その池の水を完全に酒にかえてしまうのだ。

すると、その匂いに引き寄せられるように人が集まりだし、我を忘れ限界を越えて酒を飲み続ける。

やがて池は、その人達の嘔吐物で黄に染まり、嘔吐物に混じる血で赤黒く変化していく。

最後には、池に遺体が浮かぶのだ。

だが、次の日には、それらの遺体は無くなり、元の池に戻ってしまっただと言っ。

遺体は、どこへ行ったのだろうか？

## 限界

そして、二時間が過ぎた。

池の酒は約半分に減るが、周りの人？たちの飲むペースは変わることがなく、二時間ずっと顔を突っ込んだままだった。

自分は、機嫌よく酒を啜ってる感じで、目的を忘れそうだった。

…エへへへへへへ

後ろで、一人酒を舐めていた婆さんが何かに気付く。

「とうとう来たか…」

「うえ？なあにがあ？」

「池の調整部隊だ。」

「どおこおでーすかあ？」

婆さんが指差す。

自分は、思わずその指をくわえてしまう。

「わんわんっ」

婆さんは、表情を変えず池の向こう側を見ていた。

「……………あそこだ。」 池を挟んで反対側に、人？たちがゾロゾロ集まってくる。

やがて、その集団がガヤガヤ打ち合わせを終えると、一人を中心

に人の輪ができ、ゆらゆら揺れ動きだした。

「始まったぞ、雨乞いの儀式だ。もうすぐ雨が降る。」  
「わふ？」

「アンタも、少し酔いをさました方が良いみたいだな。私の母乳でも飲むか？あはん。」

「……………結構です。」

「…そうか。」

「はい。」

「……………」

「…さて。」

元の場所に戻って、再び飲み始める。

だが、最初のペースに戻れる筈もなく、一口喉を通すにも時間がかかった。

周りを見ると、最初に比べて人？の数が少し減ったように感じられる。脱落者が出ているらしかった。

限界を超え、そのまま池へ落ち、沈んでいく猛者な人？たちは、二度と浮かんでは来なかった。

…えと…あの先客は、大丈夫だろうか？

気になって隣をみる。

先客は、うつ伏せ状態で池に浮かびながらも、酒をガボゴボ吸い込んでいた。

## 限界（後書き）

そして、冷たい雨がポツリ頬にあたる。

そして…（前書き）

どこかで…

ああ、思い出した

あの遠足当日の、朝の雨

悲しい雨を

そして…

雨が降り始めた。

ようやく減らした池の酒が薄められ、水量が戻されていく。

自分は、茫然と空を見上げていた。

……。

酒を飲み続けているのは、先客のみになってしまった。上半身が池に沈み逆さになっても、飲む勢いは変わらない。

だが彼だけでは、残りの時間で飲み干すのは無理に思えた。

…典子。…先輩。

婆さんが、自分の前に立った。

「閉じかけていた門が、動きを止めた。あの二人は、意識を失ったまま、もうすぐそこを通り過ぎる。」

「……………」

「あの世に引つ張られる前に、最後の手段を使つぞ。」

「……………?」

「少し荒っぽいのが、あの雨乞いの儀式を逆に利用して、この池に雷を落とす。」

「…どうなるのですか?」

「門が破壊され、二度と開かなくなる。あの二人も、ただではすまないが、もう救う方法は他にはない。」

「……死ぬこともある、と覚悟しろと？」

「……うむ。」

「ちなみに、本当に死んだら、どうやってあの世へ逝くんですか？」

「門の正面左の受付、三番窓口……じゃなくて、時間がないから下がっている。」

「……はい。」

婆さんから、六歩下がって正座し、様子を見ることにした。

婆さんは、両手を高く挙げて、何か呪文のようなものを唱え始める。

《世、始、光、地、由、雨、下、通、到、脱、絶……》

《……与、無、伝、来、令、提、荒、我、到……》《……爆雷どおおお  
おおおんっ》

婆さんが、両手を振り下ろし絶叫した時、一瞬先客を直撃したように思えた。

自分は、その閃光と衝撃で意識が薄れてい……

そして、



「……………た」

……………？

「……………な…た」

…ん…ん…ん？

「…あ…な…た」

…誰かが呼んでいる？

「あなたっ、あなたっ、しっかりしてっ！」

……………？

自分を呼ぶ声が聞こえたが、酷く眠い感じがして、目が開けられない。

仰向けに寝かされているらしい。体は、特に痛い所はなかった。

少し背中が痒くて、もぞもぞしてみる。

「…よかった。」

声の主も、少し緊張が解けた感じになったようだ。

「あなた、起きられますか？」

「…んん？」

強引に、自分の閉じられた瞼をゆっくりと開いてみる。  
少し明るいなか、こちらの顔をのぞき込んでいる、女性がいた。

「私、わかる？大丈夫？」

「……大丈夫だよ、…典子？先輩？……え？」

「「ふふ。気がついたら私たち、一つになってたの」「  
「……。」

「「あなたから見て、左側が私、右側が先輩。」「

「……。」

「「それで、私達の名前どうするかなんだけど、典子、琴実、利夫  
でのりこ」にしました。って変わってないかあ。」「「……じゃあ、  
あのりこ」さん。利夫って誰？」

「「「ふふふ。真ん中に挟まっているじゃない？」「  
「……。」

そして…（後書き）

…のりこ…さんの話によると、

「二人が一つになる時、目を輝かせた利夫が合体してきた」と、婆さんが解説していたそうだ。

…利夫…あの少年か…

その婆さんも、

「孫を頼む」

と、消えてしまったそうだ。

池は水量を取り戻し、何事も無かったような、普通の風景にもどっていた。

…ただ、黒こげた先客が見える以外は。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8760j/>

---

女

2010年10月21日07時58分発行